
さくらさくら

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらじさくら

【Zコード】

Z8611S

【作者名】

きみよし敷太

【あらすじ】

桜なんか咲かなければいい。

昔、愛した男が好きだった花など。

春なんて凍りついて、永遠に来なればいいのに。

雨しか降らなければいいと、願うその醜さは認めているけれど気付かない振りをしている、だつて全部あなたのせいよ、そう言つてしまえますます歪になる心、それでも仕がないじゃない。

桜の頃に殺したでしょ、桜の頃に埋めたでしょ、わたしの心、あなた汚れたティッシュみたいにくるくるまるめて捨てたでしょ、桜の頃にあなたわたしを、忘れたなんて言わせない、桜の頃にあなたわたしを捨ててしまったでしょ。だからもう今は大嫌いなの、桜が好きだったあなたのせいよ、桜さえも嫌いになってしまった可哀想なわたし、それでも心も失くしてしまったから仕がないのかかもしれないね、そうよもう何も考えなくて良いのよ、きっと。

「五百円玉が、好き」

「うん？」

「カメラのフィルムケースにね、入れて貯めているの、いっぱいになつたら一万円だから、ホールのケーキを買つの、そして切らないでフォークを振りかざして食べるのよ」

「ホールケーキ、いくつ買うんだよ」

「ううん、オーダーメイドでね、一万円分のケーキ作ってくれるといつて言うの」

「贅沢なケーキだな」

「うん」

「それぐらい、俺が買つてやるつか」

「ううん、それは駄目」

「どうして？」

「だって、復讐に傷付いたわたしに対するせめてもの御褒美なんだもん」

さくらさくら、頬う薄桃色の唇はわたしのもので、ああ、いつから本物の笑い方を忘れてしまったのかしら、雨ばかりが降ればいい、

今年の桜など咲かないように、今年の桜など薔薇のまま腐るよつ」。わたしの笑い方はどこに探しにいけばいいのかしら、忘れてしまったの、失くしてしまったの、あなたに捨てられた桜の頃に、多分一緒に殺されてしまつたわたしが持つていつた、大事な大事なわたしの笑顔、誰に返せと責め寄ればいいというのだろう、雨ばかりが降ればいい、わたしの笑顔だけ失くしたまま、桜だけが咲くなどと、そんな事を誰が許せようか。

桜など咲かなければいい、桜など、あなたが愛した花など。
あなたが愛した、花、など。

「復讐？ 誰かの恨みでも買つてるのか、怖い女だな」

「まさか、わたしが復讐しているの、だけど元々復讐とか怖い事を考えるのは向いていない人間なのよ、だから復讐すると疲れ果てるの、そんな自分を慰める為の御褒美」

「女は甘いもの食べると恋愛に近いなんかが脳内で発生するんだろ？」

「ああ、そうなの？」

「違つたつけ、だけど何か聞いた事があるぞ」

「ふうん。じゃあわたしは一万円のホールケーキ食べて復讐の御褒美として疑似恋愛を自分の頭の中だけで完結させるのね」

「寂しい女」

「知つてゐる、だけど良いの、寂しい女が不幸な訳ではないでしょ、寂しくなくなるようにもがく元氣すら今はただ無いだけよ」

「復讐つて、男と寝る事？」

「……え、」

「いや、辛そうな顔でここに有らざつて目をして俺の下になつていたからや」

「いやだ、そんな、バカな事、……あんたがヘタクソなだけじゃなくて？」

「あははは、そうかもしない、そりやそうだ、悪かった」

月の綺麗な晩に桜を見に行つたでしよう、ふたり、まさかあんな

場所でさよなら言われるとは思つてもいなかつた、あなたの好きな桜の綺麗な、月も星も綺麗な場所で、そんなのはするい、だつて夢だつたと思つてしまふじやないの、あの日の傷がわたしをまだ生き返らせない、どれだけわたしがあなたを愛していだと、知つていなかつたから簡単に言えたのでしよう、そんなさよならなど。

あもうあれから幾つの年月、いい加減に忘れねば良いものを、そう思わない訳でもないのにまだここに、あなたを想い過ぎて、未だに想い過ぎて壊れている女ひとりよ、笑えば良いでしょう、笑えば良い、それよりなにより、もうわたしの事など忘れたでしょう、今でも桜すら咲かなければ良いと呪い続けるわたしと違つて、あなたは、あなたはもう、わたしを、わたしを忘れて、しまつたでしょう。

あの日、誓つたの。

あなたの想い出なんて消えてしまふよう、たくさんの方とたくさん寝て、古い記憶から消去してしまおうと。あなたの事なんて覚えていられないぐらい、新しい記憶でわたしをいっぱいにしてしまおうと。

知つてる、分かつてる、間違えた、ものすごくひどい間違え方をした方法なのは、だけれど、それだけ、ああ、認めたくもないけれどそれだけあなたばかりでわたしは出来上がつていたのよ、寝ても覚めてもあなたの事ばかり。夢にまで見たわ、わたしはあなたへの愛で出来ていた、口にするとき笑つてしまふぐらい陳腐で困るのだけれど。愛していたのよ、それは本当、一分の狂いも隙もなく、認めたくないぐらい悔しいけれど。

雨ばかりが降ればいい、春など永遠に凍り付いていれば良い、雨ばかりが降つて、あなたが愛した桜など薔薇のまま腐れば良い。

「じゃあ復讐相手の男、その顔型ケーキでも作つてもうつんだな」「どうして、思い出したくもないのに？」

「ああ、やっぱり男なんだ」

「……何をそんなに得意そうな顔をするのよ、別に否定しないし動

「揺もしないわよ」

「昔の恋人？」

「答える義務はないと思つけど」

「ひどいな、義務とかそういう言葉を持ち出すのはさ」

「一度寝たからって、わたしのどこまでもを知りつなんて傲慢じゃなくて？」

「一度だけでも寝たんだったら、それは結構すゞい確率だと思つけどな」

「……可愛い事言つのに、バカみたいに」

「いや、田の前に可哀想な女がいるからや」

「おあいにく様、不幸じやなくてよ」

「知つてる、だけどそういう女を放つておけない質でね」

さくらさくら、咲かずに散れよ。

さくらさくら、あなたが愛した花など。

さくらさくら、その花を愛するように、他の誰かを愛するの？

さくらさくら、わたしとは違つ、別の人を、わたしにはくれなかつた愛で包むの？

さくら、さくら。

あんな花など咲かずに散れば良い、立ち戻したまま腐れば良い、やまない雨に打たれ続けて、あなたが絶望する顔が見たい、わたしを捨てたあなたの。

さくら、さくら。

春など来なければ良い、このまま凍り付いていたいのはわたしだ、あなたを失くした季節など、もう一度と来なければ良い。

もう一度と。

さくらさくら、咲かなければ良い。

「可哀想な女」

「……連呼しないで」

「いつまで誰かを恨み続けるんだよ」

「世界が終わるまで」

「世界なんて終わりっこない」

「じゃあ春が一度と来なくなる日まで」

「北極か南極にでも行け」

「……そうね、そしたら桜が咲くのを一度と見なくて済むものね」「嘘だよ、バカだな、あそこら辺行くのってすげく金がかからんだぜ」

「……お金の問題?」

「そだよ、そう言っておかないと金が出来たらホントに行っちゃいそうじやん」

「……あんた、変な男」

「うわ、それをお前が言つかな」

ひとりの男を恨み続けて、わたしはどこまで行けるのだろう。春が来ない事を祈りながら、雨が降り続けるのを願いながら、さくらが咲かずにいればいいと泣きながら、どこまで行つてしまつただろう。

解放されたくないのは、このバカバカしい想いに縛られていたいのは、未だあなたを愛しているからだろうか。疑問文にする必要もないのだ、本当は。今でもただ、愛し続けているだけなのだ、意味もなく。無駄に想いを燃やし続けているのだ、もう届きもしないといつのに。届きもしないといつのに。どこにも。どこにも届かない、あなたへの想い。桜が咲かなければ良いと思つた、本当のところの理由は、散りゆく桜に自分を重ねそだからだ、想いが届かないまま散つてしまふくせに、次の年も前の年の事をすっかり忘れ果ててまた咲く、悲しい桜に。

「飯でも食いに行くか」

「……は?」

「飯、ごはん。食いたいものは? 特にならないなら、食えないものを言つてくれれば良いや、これで結構店とか詳しいんだ」

「"ごはん?"」

「おい、なんでそこで変な顔するんだよ、あつ、笑いやがつた、なんだお前は」

「ううん……ううん、変だな、と思って。ね、わたし達ちょっと寝ただけだよ、別に恋人でも友達でもないよ」

「恋人でも友達でもなくつたって、知り合いではあるだろ？。飯食いに行って、帰ってきたら関係変わつてつかもよ」

「なにそれ」

「珍しく情報誌の星占いなんか見かけやつたら、蠍座、ものすごく今月運が良いらしい」

「……それはおめでとう」「うう」とうなづく。

「共通の話題で盛り上がれる異性が未来の恋人かもつて」「占いなんか信じるの？」

「おう、可愛いだろ？。そういう男も

「人によりけり」

「北極の話でもしょ？、本当に春が来ないのかさ」

「来ないに決まってるじゃないの」

「溶けない氷はないかもしけれない」

「だから、なにそれ」

「いや、俺ひとりで先に頭春になっちゃうかも」「うう」とうなづく。

「……宅急便で北極に送つてあげるから、頭冷やす？」「うう」とうなづく。

「それ、安上がりつぽくていいね」

「本気ならわたしも本氣でやるわよ」

「どうせなら、そんなことに本気にならないで、俺に本気になれば良いのに」

「うう」とうなづく。

「……なんてね、でも少し、本気」

「さくら、さくら。」

散りゆく哀しい薄紅の花。

あの樹の下には死体が埋まっているのでしょうか、それならわたしの想いも誰か、あの樹の下に埋めてくれれば良い。

わたしの想いを吸い上げた桜は、綺麗な紅色で咲くかしら。
さくら、さくら。

誰かわたしを掘り起こして抱き締めてくれるかしら、あなたではない人だとしても。あなた以外を愛せるわたしもいるのかしら。

すぐは無理でも、今すぐはまだ無理でも。

さくら、さくら。

いつか空の青さも覆い隠すように枝を伸ばして花を咲かせる、桜にわたしなれるかしら。

さくら、さくら。

さくら、さくら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8611s/>

さくらさくら

2011年4月30日14時17分発行